

志望動機が曖昧な社会科学系は 社会に引き付けた広報が鍵

社会科学系学部は、ここ数年志願者数の低迷が続いている。この分野と社会との関わりが高校生に十分伝えきれていないうえ、学部間の違いもわかりにくいのは、と高校教員は指摘する。主体的な大学・学部選択を支援する広報施策や、意欲的な学生を受け入れるための高校と大学の役割について話し合ってもらった。

<出席者>

大学側出席者	岡山大学 広島大学 山口大学 香川大学	栗原 考次 教授 (アドミッションセンター センター長) 高地 秀明 教授 (入学センター 副センター長) 兵藤 隆 教授 (アドミッションセンター センター長) 真鍋 芳樹 教授 (アドミッションセンター 副センター長)
--------	------------------------------	--

高校側出席者 中・四国地区の高校の進路指導教諭

が多い」と述べた。

山口大学アドミッションセンターの兵藤隆センター長は、「活字を読まないのは大学生も同じ。今話題のノーベル賞についても、作家が対象の文学を除けば、経済学は文系の学問領域で唯一の賞なのに、経済学部の学生の中には、伝記など読まないでノーベルがどういう人物かよく知らない者もある」と戸惑いを示した。

広島大学入学センターの高地秀明副センター長は「高校生対象の進学相談会で個別に質問に来るのは、圧倒的に理系の生徒。大学でやりたいことが明確で、質問内容も具体的。社会科学系を志望する生徒にはそういうところがあまりみられない」と話した。

社会科学系学部の選択が消極的な理由になりがちなことについて、高校からは、学びの内容が高校生にとってわかりにくいことが挙げられた。「高校では、将来の職業や大学選択につい

い。保護者に「少子化が進み、教員の需要は先細りになる」と話しても、受け入れてもらえないことがあるという。子どもに対する期待として公務員志向、資格志向が強く、生徒自身は理学部志望なのに、資格取得のために薬学部を薦める保護者もいるそうだ。

高校の進路指導では 社会貢献の視点を提示

社会科学系学部の人気低迷傾向は、この地区の高校でも同じという。

ある高校からは、社会科学系志望者は概して進学目的や志望動機が曖昧で、「数学が苦手だから経済学部はだめ」「法学部は暗記ばかりで座学が多そうだからやめる」など、消去法で志望学部を選ぶ傾向が指摘された。

別の高校教員は、「政治や経済に対する関心の低さが背景にあるのではないかと。そもそも新聞を全く読まないか、読むとしてもせいぜい週に1回程度という生徒

学部系統	国公立大学	私立大学
法・政治	97	92
経済・経営・商	91	96
総合政策・政策科学	89	95
社会・社会福祉	92	101
全体	98	100

各校に顕著な理系志向 経済は文転組の受け皿

2012年10月に開催した中・四国地区の高大接続協議会には、それぞれ4校の大学・高校から計8人の教員に参加してもらった。

まず、高校側からは生徒の志望状況について報告があったが、各校に共通しているのは、医療・看護を含めた理系志望者の増加である。

「入学時に文理選択の希望を聞くと、圧倒的に理系が多い。理由として、資格が取得できる、就職に有利といった声が聞かれる。また、いざとなったら文転(文系に変更)すればいいという、安易な考えの者もいる。ただ、理系志望の中には成績上位者が多く、この生徒たちは志望が揺るがない傾向にある」という説明があった。

また、「文転する生徒は経済学部志望変更することが多い。文系志望者の中では数学に強いので、センター試験、個別試験を数学で受験できれば有利と思うからだろう」という指摘があった。

女子を中心に教育学部志望者も多

て、社会貢献という視点で考えなさいと指導する。理系はその学問を学ぶとどんな成果が社会に還元できるのかが見えやすい。しかし、例えば経済学部で学んだことが社会貢献にどうつながるのか、生徒には実感がわかないようだ」「社会科学系は実学を標榜しているのに、社会でどう役に立つかが見えにくい」との声が上がった。

経済学や経営学が社会でどのように役立つかを話すと、志望先として興味を示す生徒もいるという。社会科学への関心は、職業とつなげて説明することによって育つ可能性もあると指摘された。企業の協力を得て、職場での1日研修と従業員とのディスカッションを実施している高校では、研修後に社会に対する関心が増すと紹介された。

大学側からは、兵藤センター長が「企業と共同で商品開発を行っている例は本学の経済学部にもたくさんある。こうしたことをもっと広報していく必要がある」との考えを示した。

大学の論理ではなく 高校生目線の発信を

高校側から、社会科学系学部は学びと社会とのつながりが見えにくいことに加え、大学ごとの特色がわかりにくいという指摘があり、「強みの違いが明らかであれば生徒に説明しやすい」という声が上がった。

これに対し、兵藤センター長は「詳細な説明をしても、細かい分野の違いは高校生にはあまりわからないだろう。それよりも具体的な就職先などの出口を見せるほうがわかりやすいのではないかと語った。また、「AO入試と一般入試では、受験者の大学理解の度合いや志望動機が異なるので、広報の内容を変えるなど、対象別の工夫を行いたい」との話もあった。

香川大学アドミッションセンターの真鍋芳樹副センター長は、「コアカリ

キュラムはどの大学もほぼ同じ。個々の教員の専門分野が大学の特色となっている」と述べた。

高地副センター長も「同じ学部名でも大学によって教員の専門領域がだいぶ違う。そうしたことも着目して、大学・学部選びをしてほしい。教員の専門分野を一覧にするなど、わかりやすく伝えることが必要だろう。高校生には入試難易度だけで決めるのではなく、興味のある専門分野の教員がいる大学を選んでほしい」と話した。

岡山大学アドミッションセンターの栗原考次センター長は、「学部の詳細を説明することは大切だが、基本に立ち返り、何のためにどう学ぶのかという情報発信を強化すべき」と話した。

真鍋副センター長は、「大学の個性が問われている現在、国立大学も積極的に情報を出していかなければならない」と話した。高地副センター長は、「学部によっては、教育内容や将来像が十分に伝えきれていない。学部の教員がもっと高校や高校生の実態を把握し、伝える内容の改善につなげたい」とした。

保護者への説明の重要性も挙げられた。真鍋副センター長は「国公立大学と私立大学の違いを、単に学費の違いと認識している保護者もいる。相違点の説明から始める必要がある」とした。合わせて、情報過多の時代だからこそ、ある意味で情報不足になっているのではとの指摘もあった。「名前を見聞きする機会が多い大学を選びがちで、学びの視点で選んではない。大学の広報が高校生のニーズに答えていない、つまり大学の論理で発信しているのではないかと話した。

高地副センター長は、「大学での学びと就職とを単純に線で結び付けようとしすぎているのではないかと警鐘を鳴らした。「高校生にとって、大学卒業は4年以上先のこと。志望大学選択の時点では、社会の変化は予測でき

ない。それよりも興味・関心のある分野に進み、懸命に学ぶことによって将来を切り開くという考えが大切だろう」と述べた。

栗原センター長は、「数年前に工学部離れが問題視されたときに、全国の工学部長会議で協議して、工学部連合でPR活動などを行った。社会科学系学部でも切実な危機感を持ち、高校教員と連絡を密にして対応しなければならない」と述べた。

社会科学系の学部では、大学院に進まず就職する学生が圧倒的に多い。4年間で何を学び、どう成長したかが社会に出たときの強みとなる。大学で意欲的に学ぶ学生を育てるために高大連携でできることは何か。共に考えていかなければならないだろう。

入試科目の検討・評価も 高校との連携で

高校側から、入試科目は大学のアドミッションポリシーを一番よく伝えるとの意見が出された。センター試験で課す科目を私立大学型に絞る国立大学が増えていることについて、「生徒は易きに流れる傾向がある。5教科7科目は生徒にとってきついかもかもしれないが、努力を促す入試のあり方を考えてほしい」という要望が上がった。

真鍋副センター長は「2011年から、進路指導担当の高校教員が集まる自主勉強会に参加し、情報交換ができるようになった。2015年度からの新課程入試では、大学の考えだけで入試科目を決めずに、高校の声や履修状況を知ったうえで設定したい。ゆくゆくは高校から個別試験の評価を受けるような形になると良い」と語った。

高地副センター長は、「高校の段階で、大学の学問領域を理解させるのは難しい。大学入試では大括りで受け入れ、入学後に専門を決めさせるという方法もある」との考えを述べた。